

□私の意見

私の初夢

協同の力への確信

高村 勤

〈生活協同組合コープこうべ名誉理事長顧問〉



悪夢のような一瞬が、こんなにも無惨な災害をもたらしてもう一年になる。親しい人々を失い財をなくしたが、とにもかくにも己が生きていることを喜び、なにくそとばかり頑張ってきた。崩壊の跡片つけはほぼ終わって、公共工事中心に街の復興の時期が来たようである。

だが人々の心の傷あとは癒されるどころか、今頃にかえって深刻なものになってきているのではなからうか。

瓦礫の街を彷徨した頃の身には、寒さがこたえた。日のたつのを覚えぬうちに春が来た。街路樹に芽がふき、庭の隅で草花が開いたとき、その新鮮さに驚きの目を見張ったことであつた。自然のたくましく美しいのに元気づけられた。絶望的にも覚えたのを支えてくれたのは、見知らぬ人々の助けや励ましであつた。立ち上がる力を与えられたと同時に、己の中に希望のようなものが湧いてきた。

私はコープこうべで五十年働いてきたのであるが、東灘区の本部の五階建ビルがベチャンコになっていた近くにある私のマンションも赤紙が貼られ立ち入り禁止となった。その日から全国の生協の仲間がトラックに水や食糧と人を積み応援にかけつけてくれた。延べ一万人以上の若者達が市民に緊急物資を配る働きをしてくれた。私達が想像もしなかつた程の素早くかつ効果的な大奮闘の姿に、生協というものの素晴らしさを今更のように実感し感泣していた。被災者である生協の職場の人達も生協の組合員の有志も、それに励まされて不眠不休の活躍が続く。「神戸にはパニックがなかったことが不思議」と伝えられたが、神戸にこのような人間同士が支えあう仕組みが働いていたことの意味は大きい。

今後の震災でボランティアの働きが注目された。市民生活の復興の道は遠くてまだ目途もつかない。しかし新しく芽生えたコミュニティでの人々の助け合ふ心、協同の力への確信は私達の前途に明るさを与えることになってきている、これが私の初夢である。

あの日、津高和一先生の家に駆けつけたとき、救助隊はもう立ち去っていました。救出し、手当をするすべがないと判断し、次の生存の可能性のある倒壊家屋の現場に走って行ってしまった後でした。

先生の家に出入りし始めてから二十三年。思いもよらないお別れになつてしまいました。

津高先生の西宮の家は、江戸時代からの古い農家で、南側には広い庭があり、その庭には石の作品も置かれ、先生の空間美意識が行き届いた風景でした。

猫たちは先生が子どもころからの住人で、ときには二十五匹もいたことがあります。モミの木学園で、先生が一目ぼれしてもらわれて来た「モミ」という名のビーグル犬もいました。

先生と猫の関係は、溺愛ということと全く違った、淡々としていて、ほのぼのとした付き合ひでした。猫は猫、先生は先生の世界があり、尊敬しながら共存している、といった平和な情景が広がっていました。

私が写真を撮り始めたのは、猫を写すというのではなく、先生の美意識で作り上げられた家や庭の空間にわがもの顔で暮らしている猫たち、その空気をフィルムに留めておきたいと感じたからなのです。

猫たちは、ときには先生の作品に

おしっこをかけ、柱を引つ掻き、テーブルや椅子を占領する。先生はそれを黙って見ている。そして先生は、猫たちを題材に、時折こんな随筆を書いて、愛情をさりげなく表しておられました。

「猫たちは私の少年期以降の人生の折々を凝視しているようでもあった。悲喜こもごもが交差する哀歎の

それが…。

あの日、津高家には、あの時間、十四匹の猫がいました。先生と夫人の遺体が収容されてから、猫たちを探しましたが、一時は一匹も姿を見せませんでした。約二週間後、ほつぱつとがれきの脇に遺影が置かれた庭に戻って来ました。でも、抱っこさせてくれるのは四匹だけでした。

猫は猫で、あの思いを絶する経験を耐え、乗り切ろうとし、遺影の前を所在無く歩き回り、主の不在をいぶかしく思っていたのではないのでしょうか。

この庭で、先生の誕生日には「自庭展」が開かれ、さまざまな分野の多くの人たちが先生の作品に囲まれて談笑していました。その同じ庭の、かくも異なる空間のありようは、胸えぐられる思いです。いまここに立つと、無限の虚空に鎮魂の祈りをさらに満たさなければ、と静かに思います。

鎮魂

「津高家の猫たち」に代わって

吉野晴朗（写真家）

渦中で、猫は黙々と不介入ではあったが点景となっていた

古い農家に集う猫たちと、抽象画家。その静かな空間を撮った写真がかなりの数になり、雪子夫人から、本になるといいますね、と言われていました。急ぐ話でもないのに、わたしはほつぱつ、点景としての猫がいる津高家の空間、をカメラに収めていました。

追記 十四匹の猫たちがれきから救出された老犬モミは、被災動物救援団体の人たちの支援で、静岡、高山、石川、和歌山、京都などの心優しい里親の下に引き取られ、元気に暮らしています。

「津高和一追悼展—絵画と詩のはざま」が一月十七日から三月三日まで西宮市大谷記念美術館で開かれます。

写真集「津高家の猫たち
阪神大震災に見舞われて」から



先生の朝食後、猫たちは新聞に興味がない



母屋の正面と石彫作品（1972年）とコネ



津高家の猫たちは震災後、遺影とガレキだけの自宅に帰ってきた。



〈よしの・はるあき〉

一九四七年生まれ。大阪芸術
大学美術学科写真専攻卒。日
本写真家協会会員。大阪芸大
講師、夙川学院短大講師。著
書「列島一〇〇座ふるさとの
富士」「手紙をくたさい」「葉
精の詩」「津高家の猫たち」
「阪神大震災に見舞われて」は
九五年十一月発行。東方出版。
1300円。



貝原俊民 兵庫県知事

●新春知事対談

二十一世紀を拓く、 文化豊かなまちづくり

貝原 俊民

〈兵庫県知事〉

井野瀬久美恵 〈甲南大学文学部助教授〉

新しい年への期待

井野瀬 あけましておめでとございます。新

しい年が始まりましたが、震災の時に大学が避難所となったこともあり、神戸にあって、あの時を経験した大学として、何を伝え、何を教え



井野瀬 久美恵

甲南大学文学部助教授。専門はイギリス近代史。女性や子ども、若者といった視点からモノや情報の動き、大衆文化などを研究し、「帝国の時代」のイギリスと植民地社会のネットワークの再考を試みている。著書は、「大英帝国はミュージックホールから」「子どもたちの大英帝国」など多数。

兵庫2001年計画推進委員会専門部会員、阪神・淡路震災復興支援10年委員会委員なども務める。

ていくのか、問い続けていきたいと思っています。
知事 おめでとうございます。被災された皆さんは、大変つらい厳しい生活を送られていることだと思いますが、厳しいなかにも勇気と希望を持って新しい年に立ち向かっていただきたいと願っています。

井野瀬 震災で、形あるものはつぶれてしまいましたが、私たちは、目には見えないけれど、震災にも負けない人と人の精神的な強い結びつきを得ました。地域のコミュニティーの持つ豊かさや幸せについて、改めて問い直されているように思います。

阪神文化の特性を生かした復興へ

知事 震災から一年、いまなお四万八千三百戸

の仮設住宅に十万人近い方が入居されていますが、ご自分の家を確保されて、仮設住宅から退去される方々も一千世帯ぐらいい出てきています。

また、がれき処理も九十%近く済みでしたし、地域の人々の間で新しいまちづくりの合意形成が進み、住宅建設も大変な勢いで進むなど、いよ本格的な復興の時期に入ってきています。

井野瀬 まちにも明かりが少しずつ戻ってきてきましたが、震災前に比べて少なくなったその明かりを見て、神戸の百万ドルの夜景を支えていたのは、そこに暮らす人々の平穏で幸せな生活だったとしみじみと感じました。そして、その生活に温かみや、人間のふれあいをどうプラスしていくかが、広く文化の役割だと思ふのです。
知事 阪神・淡路は、外国に開かれた地域ということもあり、明るい未来志向を持った人たちが

が多く住んでいるように思います。この抜けるような明るい気質、文化的な風土を生かして、ハイセンスな生活をつくっていく、そういう復興をめざしていきたいですね。

井野瀬 そうですね。震災直後に、これはすごいな、と印象に残ったのは、橋の上でお花を売っていた光景ですね。生きるか死ぬかというこんな時にも、花を買うという優雅さや奥ゆかしさを持っている。私も買ってしまいましたけど(笑)。

この地域には、どれだけ強い地震が襲っても壊れない文化が根つき、歴史的に積み重ねられているんですね。その延長線上に私たちがいるわけで、この蓄積の部分をどう二十一世紀の未来に引き継いでいくかが大切ではないでしょうか。

新しい時代を先導するまちづくりを

知事 二十一世紀は、「アジア・太平洋の時代」になると言われています。戦後、日本が経済成長するに伴い、日本人が外国へ旅行しはじめたように、いま、東アジアを中心に経済がめざましい発展を遂げ、人口も急激に増加していますので、アジア各国から、日本を訪れる旅行者も増加すると見込まれています。

人間対人間のつきあいのなかでは、やはり文化性、人間性が高いと、お互いに尊敬しあえる

し、信頼もできて、素晴らしい交流や人間関係も生まれます。

井野瀬 明治以来、日本人は、もっぱら欧米諸国に対して、どういうもてなし、ホスピタリティを見せるかに、一生懸命になってきました。しかし、これからの時代には、アジアにも目を向け、日本らしい、神戸っ子らしいホスピタリティとは何かを模索して、元気を出さなければ、神戸から光が消えてしまいますね。

知事 これからは人々が、普段着で諸外国と交流する「大交流の時代」になるので、復興にあたっては、単に震災前の状態に戻すのではなく、外国の方々からも魅力のある地域として、楽しみに来たり勉強に来たりしてもらえるような、まちづくりを成し遂げることが大切だと思います。それには、日本さえよければいいという考えではなく、お互いのためになる関係を築いていかなければなりません。いま、中国の上海・長江と神戸港を結ぶプロジェクトが進展しており、被災地とアジア双方の発展に寄与すると期待されています。

神戸は、明治の開国以来、西洋の文化を日本に伝える窓口となり、戦後は日本一のコンテナ港として高度成長を支えるなど、大きな役割を果たしてきました。そしていま、関西国際空港の開港や世界最長の吊り橋・明石海峡大橋の建設などの新しい国土軸の整備が進められるなか

で、第三の開国の時期を迎え、貨物だけでなく、人や文化、情報などが交流するまちづくりを進めていかなければなりません。

井野瀬 二十世紀は、どれだけ多くのモノをつくったかが大国の基準となるモノの時代でした。戦後の神戸がモノの交流拠点となったのは、ある意味で二十世紀という時代を象徴しているんですね。

二十一世紀がカウンタダウンに入った現在、モノよりも、人が行き交う、それとともに、言葉や風習、慣習などの文化や情報が動く空間づくりが大切になりますね。

言葉だけの国際化ではなくて、交流人（こうりゅうびと）をどれだけ生み出すか、つまり都市の付加価値を求めて行き交う交流人口が都市人口に置き換えられ、その間をいかに快適に過ごせるか、それが神戸のホスピタリティになると思います。

知事 「農村は神がつくり、都市は人間がつくった」とあるイギリスの学者は言っていますが、人間がつくる都市をうまく環境に調和させ、しかも高齢社会に入っていくなかで、明るく文化豊かなものにしていく、そういう魅力にあふれた都市づくりを進めていきたいですね。

また、ある経済学者は、「二十世紀をつくったのはメガテクノロジー（巨大技術）だ」と言っています。その象徴的なものが、原子力や交通・情報といった分野ですが、これからメガテクノロジーが進む方向は、世界的な人口急増を背景とする食糧、資源エネルギー問題やオゾン問題の深刻化などに見られる環境問題、あるいは交通事故、貧困や犯罪などの都市問題だと思えます。こうした人類全体の課題に対処する国際的なアプローチのひとつとして、「WHO神戸センター」が開設され、「都市化と健康」をテーマに、



総合的な研究活動が行われます。さらに神戸大学でも、都市の安全について学際的に研究する「都市安全研究センター」をつくろうと検討されているんですよ。

井野瀬 そうした二十一世紀的な、理系でも、文系でもない、非常に柔らかい人々がいる都市こそ、人を集める魅力を放つでしょうね。神戸は条件がそろっています。多くの人間が移動して、その移動する人間たちに、「ああ、神戸はいいところだ」という印象を持って全世界に散らばってもらったら、それでいいというような、そういう時代が、そこまで来ていると思います。

共生のつくりを基本とした創造的復興を

知事 世界の大都市は、どこを見ても川のそばにあります。神戸は、港を開くために川のなるところにつくられた人工的なまちです。このため、人工的なよさがありますが、弱点もあります。いま、いろいろな技術が開発されていますが、二十一世紀に向けて、メガテクノロジーの力を生かして、人間界と自然界のコミュニケーションを図り、心をひとつにして、それを克服していけば、世界に誇り得る、特色あるまちづくりを進めることができます。

井野瀬 阪神間には多くの大学がありますが、これまで、大学とまちが別々の方向を向いてい

たように思います。お互いの向き方や視線を少しずつずらしていかないと、二十一世紀は見えてきません。まさに、大学と兵庫、神戸という空間同士が向きあって、共に生きていくという問題をつきつけられているような気がします。

知事 震災の極限状態のなかで、〈共に生きるころ〉が、多くの人々に共有できる思いであることを再確認しました。共生をテーマに、人間らしくうまく調和させていくのが、これからの阪神・淡路文化ですね。井野瀬さんがやっておられる「再生支援の会」でも、この地域なら文化を中心に復興するだろうという期待があるから、十年続けて応援されるのでしようし、私たちもそれに応えていきたいと思っています。

井野瀬 阪神文化が元気を失い、しおれてほしくないからエールを送っています。どこへ行っても、神戸はどうかと聞かれます。「どんなまちだろう」と世界からいろいろな人が見にくる復興をぜひ実現したいものです。

知事 外国の方は、この阪神・淡路地域がどのような復興を成し遂げていくのか、非常に興味を持って見えています。

そうした期待に応えるためにも、二十一世紀を先導し、人類社会に貢献する創造的復興をぜひとも成し遂げたいですね。

地域文化論

〈その191〉

灘の酒蔵をのこそう

武田 則明

〈港まち神戸を愛する会〉



震災前の灘五郷

西郷、中郷、魚崎郷等の日本を代表する酒どころの灘五郷は阪神・淡路大震災で壊滅的に被災した。約90%が全半壊になった。白鶴や菊正宗の大手酒造メーカーの酒造博物館は何らかの形で復元されるであろうがそこでは酒を造らない。しかし、中小の酒造メーカーの酒蔵はもとどおり復元されることはないだろう。パブル経済がはじけたとはいえ、いまだに高い土地価格は土地の有効利用または高度利用との大義名分のために、容積率



全壊した酒郷のひとつ

現在では醸造技術が進歩して、四季醸造と称して、ステンレスの瓶で連続的に酒が造られている。私ではできればそんな酒は飲みたくない。秋に実った山田錦を昔ながらの木造の酒蔵で寒に造られる酒を飲みたいものである。木造の柱や梁には数多くの微細な菌が住んでいて、その酒蔵独特の味と香りを作ると聞いている。それを鉄筋コンクリートの酒蔵でステンレスの中の清潔な工場のできる酒は化学実験の道具にされているようだ。均一で

いっぱいマンションに建て変わっていくだろう。大震災の後、住宅不足が叫ばれている時に一戸でも多く一刻も早く住宅が供給されることが望まれているが、阪神間の文化を形成していた景観が壊され、それを復元することもなく、全く異なった姿に風景が変わってしまうことはいかがなものであろうか。

安全な酒はできるかも知れないがいやである。

酒蔵の主人は、かたくなに伝統を守って、旧来の木造二階建の蔵を造ってほしいと思う。酒は大切な日本の文化なのだから。地震で壊れたけれども、少し金物で補強するか、柱と梁のほぞを深くすれば防げた倒壊である。現実には梁と柱に直径7.5ミリのカスガイが打ち込まれていただけで助かった建物もある。

一方、酒蔵の地域は準工業や工業地域で防火地域に指定されている。ここでは、ある規模以上の建物は鉄骨造か鉄筋コンクリート造にしなければならぬし、木造で造っても外壁には焼杉板貼のような燃える材料が使えないことになっている。これでは在来の工法で酒蔵を建てようとしても法律がそれをできなくしている。日本の伝統であり文化であった町並みを法律が壊しているといえる。

国民の健康と安全を守るのが法の目的であるので、町が大火に見舞われてよいわけではないが、防火用水や、スプリンクラー、火災報知機等の現在の技術でいくらでも安全を守る方法はあるはずである。行政は酒蔵が在来工法で再建しようとする時に、むしろ助成をこそすべきである。これが阪神間の都市景観を守る重要なポイントである。

よそ者の知恵を活かそう

新田次郎氏の小説に「八甲田山死の彷徨」というのがある。高倉健の主役で映画化もされているので存じの方が多くと思う。明治三十五年、青森の第八師団歩兵第五連隊が八甲田山で遭難、多くの兵士が命を落とした事件である。青森在勤中に聞いた話であるが、その後日談がまた悲しい。地元の人たちは厳冬の八甲田山の恐ろしさを知りつくしているためか、捜索隊への協力要請に応じられなかつたそうである。困り果てた陸軍が頼つたのが北海道のアイヌの人たちとアイヌ犬。彼らの知恵と勇気が困難を極めていた捜索の大



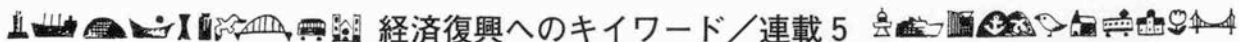
〈日本銀行神戸支店長〉

遠藤 勝裕の

きな助けとなり、ほとんどの遺体が発見されたとのこと。そのときの犬たちは今も麓の村でひっそりと眠っている。

震災直後の神戸、あまりの被害の大きさ、恐ろしさに呆然としていた我々を励まし、勇気づけてくれたのが多くの《よそ》からきた人たち。行政レベルから個人ボランティアに至るまで様々なレベルで日本中から、否世界各地からも駆けつけてくれたことは一生忘れられまい。当事者である我々が見えないこと、気がつかないことを支援者たちが実によくカバーしてくれた。これはわたしの経験ではあるが多くの人たちもそう思ったに違いない。岡目八目とはよくいったものである。

翻って、あれから一年が経ち、復興へ向け具体的な施策をどんどん進めなくてはならない時であるが、何



経済復興へのキーワード／連載 5

か今ひとつ盛り上がり欠ける気がしてならない。私だけの思い過ごしかもしれないが…。

被災直後は当事者であつた我々転勤族は、時間が経つといい意味でよそ者に変身する。このため神戸の実情に関してはまさに岡目八目、いろいろなことがよく見えるのである。例えば、経済復興との観点から神戸の街をじつと見ていると、私には復興上の問題点として四つのギャップが見えてくる。

すなわち、第一は、当地神戸と中央のギャップである。これは、国レベルから一般企業、個人に至るまで実に幅広い。第二は、ハードとソフトのギャップ。ストックとフローと言い換えてもよい。ハード作りにはかり目がいき、肝心のソフト面での対応がおろそかになっている気がしてならない。ハードをうまく使いこなす、有効に利用する手段に一工夫必要ということである。第三は、製造業と非製造業の回復ギャップ。神戸経済でウエイトの高い非製造業の遅れがとくに目につく。そして最後は官と民のギャップ。どうもお互いに責任のなすり合い、非難しあっている姿が計画の具体化の支障となっているのではなからうか。

でもこのように問題点が明らかであるのだから深刻になる必要はない。答えは簡単、ギャップを埋めればよいのである。埋め方については、これまでのキーワードの中でも度々示してきたつもりであるが、とりわけ第一の、中央とのギャップを埋める責任は我々「半神戸人」であるよそ者にあるともいえようか。両方に足をかけ、両方の状況をよく知っているだけに動き易いし、知恵も出し易い。ギャップ解消に精々我々の知恵を使ってもらいたい。もちろん頼まれなくとも行動するつもりではあるが。

いい話、明るい話を 増やしたい

明けましておめでとうございます。
長くつらい思いの一年だった人。
ただひたすら、今日を生きたために、明日も元気で生きていこう、と思いつつながら、あつというまに一年がすぎた、と思っている人。被災地の一年には、さまざまな思いがゆれている。



〈神戸市会議員〉

小山乃里子の

先日も、友人と昨年の正月の話をしていた。「初もうで、三柱めぐりをしたけど、神さんも仏さんもあのこと、知ってはったんやろか」
「エベツさんもそうや。ほら、ノコ、大きな笹を買ってたやないの…」
仮設住宅にお住まいの方と話をした。年配のひとり暮らしの女性である。
「ほんまに、この世に神も仏もない、と思つてます。いはんねんやつたら、お父ちゃんか娘、どちらか一人でも助けてほしかった」

新米議員奮闘記／連載4

木枯らしの中での立ち話。
どんななぐさめの言葉も見つからなかった。
人は誰でも、新しい年に、なにがしかの夢を求めもの。

家を失い、家族を失い、生きる希望を失った人に、新しい年は何を運んでくれるだろう。
市会議員になって半年がすぎた。

「思った以上の復興ぶりですなあ」
他の街から来た人が感心したように言った。いまだ、壊れた家が累々とつらなっていると思っていた口ぶりだった。

「ガレキが取りのぞかれただけです」
もちろん新しい家も建ちだしてはいる。けれど、ほんの一握り、といつても過言ではない。

いまだ解体されない無人のマンションがいくつもある。

なのに、東京あたりでは、震災の復旧作業は終わった、復興は、その街独自でおやりなさい、と幕を引こうとしている。

「どこが終わったんよ。ちゃんと、来て、見て、考えてよ」

新米議員はただ怒るのみである。

被災地の人間はもつともつと怒るべきなのだ。
湾岸戦争で、アメリカから一言いわれただけで、

あれだけお金を出せる政府が、何故、自国民の為に、お金を出せないのか。

長引く不況の責任は、一体どこにあるのか。不況の中で、この大震災をどう受け止めているのか。

この一年、いい話、明るい話が少しでも増えるように、新米議員、ガンバリマス。



(あさい・のぶお) 1935年新潟県生まれ。東京外大卒。読売新聞ワシントン支局長など海外勤務十年以上。米国ジョージタウン大客員研究員、三菱総合研究所客員研究員などを経て87年から現職。著書「アメリカ50州を読む地図」「民族世界地図」ほか。横浜市在住。

■浅井信雄対談シリーズ〈17〉

長江の雑踏を港町神戸へ

浅井 信雄

〈神戸市外国語大学教授〉

下河辺 淳

〈阪神・淡路復興委員会委員長〉

浅井 復興委員会の委員長を引き受けられたのはどんな経緯だったんでしょう。

下河辺 わたしが高知に行っているとき、村山総理や五十嵐官房長官から「帰ってこい。そしてまとめ役をやって欲しい」と言われました。わたしのような高齢者を使うようではだめだと断っていたのですが、結局やることになった。その時にひとつだけ条件を付けてくれました。「委員会が提案したことは総理は引き受けてくれますか」と尋ねると、村山さんは「全力を挙げて提案を実行する」と言われたので、断る理由がなくなりま

した。後になって気が付いたのですが、政府が出来ないことを村山さんに言っただけなのではないかという、逆のことがあったんですね。だから提案にはかなり骨が折れました。

浅井 阪神大震災は日本のバブル経済崩壊と重なったので、非常に不運だった。戦後五〇年で、みんなが長期のものを考えているときにもぶつかって、神戸のまちの歴史や将来を長い目で見る議論がおきている。そういう中で下河辺さんが提案された「上海・長江プロジェクト」は注目すべきアイデアだと思います。長

江を航行している船をそのまま神戸港に入れよう、中国の内陸部と神戸との交易を盛んにしようというプロジェクトです。

下河辺 大型のコンテナを、コンピュータを駆使し、可能な限り無人化して扱う近代的国際港湾論があります。上海・長江プロジェクトはそういう超近代化の港ではないということが重要なのです。荷物が動くのと同時に人や文化と一緒に動くことを回復したいのです。神戸が素晴らしかったのは、船が情報、文化、ファッションまで運んだからなのです。人のいない貨物の港ではなく、大勢の人の賑わう雑踏のある港にしたい。港町の面白さ、良さを中国と付き合うことで回復できないかと思うのです。

浅井 政治、経済、文化を含めて中国はこれからどうなるのか、安定的に成長するのか混乱するのか、そういうことも配慮された上での結論なのでしょう。か、**下河辺** そうです。上海・長江プロジェクトに成功しないと中国は混乱する、という見方なのです。中国は

八〇年代に沿岸地域の開放政策を行い、経済発展の上では成功したが、副作用として内陸部との格差が拡大しました。格差解消のための内陸開発、長江流域をいかに発展させるかが、中国政府の命がけのテーマなのです。日中でそれをどうするかを議論していたところ地震が起きた。地震をきっかけに神戸の復興と中国政府の課題がどこかで一緒になれないかということから始まった。日本では神戸と大阪との仲が良くないとか、日本政府がなぜ神戸だけ特別にするのかとありますが、そんなことは言ってもらえない。

浅井 仮に震災がなかったら、上海、長江と日本をつなぐと言ったときに日本側の接点は必ずしも神戸ではなかったのではないのでしょうか。

下河辺 わたしは、大阪ベイエリアの特例法とつなぐと思う、大阪の財界人と話をしているときに地震が来た。話の重点が神戸に移った感じはあるが、それでも歴史から言えば上海と神戸がつながることは意味が大きいですね。しかし神戸は天津と姉妹提携を結んで



(しもこうべ・あつし) 1923年東京都出身。東京大学工学部卒。建設省計画局、経済企画庁総合開発局長、国土庁計画・調整局長、国土事務次官、総合研究開発機構理事長。東京海上研究所理事長。Jリーグ裁定委員会委員。著書「戦後国土計画への証言」。東京都在住。



浅井信雄さん

これだといって情熱を傾けるテーマがなかなか出てこない。しかし、ぶつけてみる大胆さがいまいるんじゃないかと思えます。慎重だけでは動きません。

浅井 具体的にはどういう住宅やまちをつくるかということになるでしょうが、委員会の提言が途中で修正されましたね、住宅の戸数の点で。三年間で十万户が七万七千戸に。この背景はどういうことだったんですか。

下河辺 簡単に言うと、十万户を提案した後に、神戸の方々には東京都民と違う感覚があるという点に気が付いたのです。たとえ条件が悪かろうと自分の家に住む、住みたいということが被災者の心だということに気が付き始めたのです。東京では公営住宅に収容することとなるのですが、神戸の人にすると、公営住宅に行くというのは最後の手段。可能な限り自分のコミュニティを再興したかったんじゃないか、ということに気が付いたのですかね。

浅井 まちをあちこち歩かれたのですか。
下河辺 ええ、委員長としては行けないので、ボランティアに混じって非公式に二度ほど回って歩きました。聞いている話とは随分違っているなあという印象を受けました。

浅井 お忍び視察ですね。それで神戸の見方が変わりましたか。

下河辺 かなり変わりました。人々の考え方は、東京や関東で考えているのとは違うなあと思えましたね。

一律に、近代的な都市計画をすればよいということにはならないと思えました。未来の人間が住むのによいまちをつくる、そうしないと、スラムになってしまふ、という心配もあります。しかしそんなことも言っておれない、とりあえず自分たちの一生を支えるまちに取り組もうという人たちがいらしやる。ボランティアの建築家に協力してもらって、住民の間で話し合いが進んでいる所もある。だから、いま神戸のまちでは多

いて、上海と結んでいるのは大阪。これからこのプロジェクトが膨らみを持つにつれ、日本側でも神戸だけの問題ではなくなるでしょうね。

浅井 たくさんの提言の中でこのプロジェクトは一番意気込みが感じられます。日本とアジアの国々との広い関わりという発想の中で見事に集約されているような気がします。わたしのところの学生も近ごろは国内で就職せずに、中国、香港、シンガポールでという発想になってきているので、ピタッと時代の流れに合う。下河辺 このプロジェクトに関連して中国からの留学生が神戸に増えたらいいなと思います。そういう文化的な広がりできると面白いですね。

★家よりもまちに生きる神戸

浅井 復興委員会が出された提案の中には、キーワードといえますか、「慎重かつ大胆に」という言葉が出て来ます。慎重と大胆は矛盾するような気がするんですが、これを両立させなければいけない。大変なことだと思えますね。

下河辺 もちろん大変ですが、いま「大胆」があまり出て来ない雰囲気がありますね。現場を見てみると、そんな華やかな気分になれないということもあるし、未来に向かって自信が持てないということもあって、



下河辺淳さん

彩なまちづくりのコンペをやっているような気分がしています。どれも疑問があるけれども、どれもすばらしい。それを一律に評論してしまうのは絶対いけないと思っています。いいところをいかに伸ばすかという話し合いにしたいと思っています。

浅井 自分の土地に対するこだわりも強いような気がします。木造家屋が密集した地域ではあまりにも被害が大きかった。将来の安全のために元の土地にそのまま戻って来てはいけない、土地の一部を自分を含む公共のために提供しなくてはいけないという要請も分かれる。ところが、危なくともいい、元いたところに住みたい、と言われる方がいる。そういう論理にはなかなか対抗できないですね。

下河辺 対抗できない側面というのは、防災的な視点とか土地の資産というテーマで考えがちだけど、神戸を見てそれが間違いいではないのではないかと気が付き始めました。まちのインフラストラクチャーとして、人と人との付き合いがむしろ優先しているのではないかと思いはじめたのです。お互い助け合っているまじがある。そういうところは、不動産問題や防災問題であるよりも、人と人との絆を大切にしている。それはまちづくりの基本かも知れないですね。不動産にこだわっている東京型とは一味違うものを感じます。神戸全体だとは言わないけれど、そういうまちがありま

すね。都市というのは、都心部に木造密集地区があって、人の賑わいがあることが欠かせない。それを追っばらったらいというにはならない。それでいながら木造密集地区は、危険一杯ですからほっとけない。これはわれわれにとつての大テーマですね。

浅井 大きなテーマですが、結論が出るのかなあと思える微妙な問題ですね。

下河辺 ええ、そのために、一般論ですが、壊れやすいという叱られますが、壊れにくいということをテーマにしよう、壊れても人の命は助かる、建て直しやすいということがいいのではないかと議論し始めたのですね。壊れるけれど人は助かるという方が…。

★災害救助にもう少し強権を

浅井 下河辺さんが関係しておられた国土庁の対応が、大震災後いろいろ議論されました。三原山の噴火のときにも議論がありました。同じことがなぜまた議論になるのか、そういう仕組みになっていて、宿命的なものなのかなとも思えるのです。

下河辺 災害に対する法律は六〇年安保、七〇年安保の下で作られました。政府が強権を持つことに対して世論が認めないときでした。ですから災害に対しても政府の強権がないのです。それは、防衛庁ひとつをとっても、知事がきちんと要請しないと行っではいけないというのが世論でした。今度でも、知事が電話では猛烈に大変だと陳情していたみたいですが、防衛庁は陳情の電話では動ける状態ではないんです。だけど態勢は整備して待っていた。ところが出動命令が出せない。これは制度的な拘束なのです。これからは少し強権を持つ手続きを国民に納得してもらっておかないとね。国土庁の対応がよくなかったというのと、それだけでみんなが納得してしまった、というのではまずいですね。もっと機動性を持たさないと同じことを繰り返

す心配があります。

浅井 強権ということと別の言い方をするとリーダーシップということだと思いますが、今回は中央にリーダーシップがなかった、という批判もありました。復興の段階では、復興委員会の基本的な考えは、国が主導するのではない、地方が主導するのだという考えだと思いますが、しかし行政の手続きを見ると、官僚の世界、お役人の世界では手続きを大切にしなければならぬという要請があって、それをやっていたら結果が多少まずくても叱られない雰囲気があるような気がします。これをどう克服するか。

下河辺 先の防衛庁の問題で言うと、午前一〇時過ぎに村山総理の意見で自衛隊を派遣したのです。けれども法律的に言うと、問題が残っている。知事からの書類の上での要請手続きができていない。それができるまで待つのはおかしいということで、政治判断で出動させた。このリーダーシップは評価されてはいいのですね。

縦割り行政については、復興委員会が心を配っているテーマです。何一つ一官庁ではできないという問題です。

上海・長江プロジェクトだろうが何だろうが、全部、縦割りが協調してくれないとできない。これはわたしにとっては一つのおもしろさです。総合的なプロジェクトの提案をする立場の人がいないということも気が付いたのです。総合プロジェクトのリーダーがいらないということが、今度わたしを経験した一番困ったことですね。

浅井 行政手続きとかマニュアルとかは、危機においては機能しないということとをみんなは分かっています。民間においては第一線の判断が社長の判断だとか、会社の方針だとか言われていますが、こうした柔



対談する下河辺さんと浅井さん(大阪エアポートホテルで)

軟性は行政には求めがたいものなのでしょうか。

★急がれる「医職住」の復旧

下河辺 そうではなくて、例えば県の衛生部の職員が被災各地を回ってされた仕事は、地方公務員の範囲をはるかに越えています。県庁が責任を持ち切れないほどのものです。自分が持っている職責とボランティアな部分のドッキングで現場が動いていたのは重要なことです。これは神戸新聞の記者でも取材に行つて救助を求められたら放つてはおけなかったということと同じですね。企業のサラリーマンでもそうです。ゼロックスの会社がどんなにただでコピーしてあげていたことなども社長が決めたことではないですね。こうしたときに組織の人間が組織外のことまでやるというのはボランティアの基本ではないでしょうか。

浅井 復旧、復興には切迫したものと長期的なものがあります。福祉や教育などは長期的なものです。財政が逼迫して来ますとそういったところにもしわ寄せが来やすい。神戸空港のプロジェクトも長期的なものでしょうが、住民の間にはいろいろな意見があります。力をつけて行くには必要なプロジェクトだという意見はよく分かりますが、一方で、震災の復興のときに空港どころではないという素朴な声もありますが、どう考えられますか。

下河辺 空港を含めて社会資本を充実させることは必要不可欠ですから、今回の補正予算にも取り入れられています。けれど、社会資本だけでは復興につながると思えない。われわれは「医職住」という変な言葉を作りましたが、この「医職住」を急がないと復興できない。生活を保護することも、職がなければどうに

もなりません。神戸でどんな職を開発するかに挑戦しなければなりません。復興委員会としては新しい産業構造を作るためには何をしたらいいのか、という提案をまとめてみました。

教育でも、わたしたちが記念プロジェクトとして、国際級の研究所を提案したのですが、それに応じた具体的提案が大学から出て来ない。弱っています。二十世紀のために神戸に一番残したい施設にしたいのですが。神戸の震災の記憶はだんだん薄れて行く。風化して行きますね。そのときに、この研究機関だけは残ったと言えるようなものを作りたいたいです。しかし地元から出てくるのは、自由の女神を造りたいというようなことで、それよりはと思うのですが。

★通過交通都市からの脱却を

浅井 震災のときの被害が大きくなった点から、複数で代替のものを用意することの重要性に目が行きました。道路でも、例えばロサンジェルス地震のときには、わたしも見て来たのですが、高速道路が倒壊してもバイパスがいくらでもある。神戸は海と山との間が狭くて、いいなど言われていたが、それが問題であることも明らかになった。

下河辺 わたしは前から神戸に悪口言っているんですけど、神戸というまちは明治以来国際都市としてできて、都市計画としてもとでもよくできていたと思うのです。それが戦後の高度成長期に海に平行した幹線道路でまちをずたずたにした。通過都市になってしまい、ターミナル性を失った。都市構造としては一番困ったことです。山から海へのルートをいかに回復するかが神戸市の都市としてみると重要じゃないですか。

浅井 最後に厳しい本音が出たようですね(笑い)。

下河辺 言い過ぎちゃったかな(笑い)。

浅井 最後は特によかったですね。

下河辺 高速幹線の島みたいなところにビルが孤立して建ったりするでしょう。車でアプローチさえ難しいような。あれはまちじゃないですね。何とかしなきゃいけないと思っただけれど、元どおりに復興していきま

すね。

浅井 セっかくの、というと怒られますが、チャンスが生かされていないですね。

下河辺 復興委員会でも、神戸の新しい車社会を見直そうとちよつと言ってみたんですが、なかなかみなさん乗ってこない。車から離れることは、近代都市ではできないでしょうが、車にどう対応するかということ

を神戸はもっと議論しないと、まちはとんでもないものになってしまいますね。

浅井 わたしはいつも気になるのですが、神戸の人々は六甲山の南に執着し過ぎると思うのです。六甲山の北側も神戸ですよ。向こうは神戸ではないと思っっている人が多い。

下河辺 わたしはむしろ逆で、六甲山の向こうをいじらないでくれと神戸市に随分言い続けたのです。神戸市としては六甲山の裏しか開発の余地はないと言う。

これからますます六甲山の裏に行くでしょうが、よっぽど良いプランを作ってもらわないと危ない。河川管理、治山問題などいろいろありますからね。

浅井 洪水の可能性などもありますね。

下河辺 ええ。困っていますけど、百五十万人の市民がいま百四十五万人になっている。実際はもっと減っているでしょうが。百五十万人都市をやめて百二十万人都市にしたら余裕が生まれてくるのではないだろうかという気もしたりしています。ところがそれは禁句ですね。いかに回復するかと言わないと復興委員会は身がもたない(笑い)。もうちよつと知的創造力があるまちを作っていただと良いのですが。